



お品書き

【その吉】 CODEレター VOL.29
【その式】 プロジェクトニュース
【その参】 懇親会のチラシ

以上

「共育が大切だ」

村井 雅清
CODE理事・事務局長

CODEは、「災害救援」という活動を主な事業として行っていることから、こうして一年一年を振り返りつつ、今後の活動方針を提案し、決めていくことになる。6月に予定されている総会で、正式にすべてが審議され、決定されていく。

さて、昨年度CODEが救援活動を立ち上げた災害は、アメリカを襲ったハリケーン「カトリーナ」、メキシコ・グワテマラなど中南米を襲ったハリケーン「スタン」、フィリピン・レイテ島での大規模地滑り、パキスタン地震となる。阪神・淡路大震災以降、CODEの前身の各救援委員会がかかわってきた救援活動の回数を含め、現在で39回を数える。平均すると1年に3回から4回は、世界中で甚大な災害が発生していることになる。

CODEの主な活動分野として「災害救援」といったが、当然のことながら災害などは起きない方がいい。しかし、事前に災害を防ぐことができないからこうして災害が相次ぐ。「悔しい」し、「歯がゆい」。

でも、人間には他の生き物よりすぐれた「知恵」というものがある。この知恵を生かして災害が起きても被害を減じることができる。これを「減災」というそうだ。明らかにこの「減災」という言葉が関係者の間で、広く云われだしたのは阪神・淡路大震災以降だといえる。つまり「知恵」が生かされている証拠だ。

ところで、この「減災」のための知恵で、最も大切なのは何だろうか。誰もが一度災害を体験すると、少なくとも数年間は「二度とあんな目に遭いたくない。」と思う。ところが、災害に遭った人以外は、「自分だけは災害に遭わない。」と思っている。これを「正常化の偏見」というらしい。事前の備えを効果的にするには、やはり痛みを伴わなければならないのだろうか。

「いや、そんなことはないはずだ！」。人間は自分の経験をもとに、共感したり、想像したりする感性がある。それを豊かに養う機会が「教育」ではないか。CODEが、今スリランカで展開している防災教育の成果を、また日本に持ち帰り、自分たちの「防災」に生かしたいと考えている。これができるのは「学びあいの知恵」があるからだと言える。「教育」は、本来「共育」と書くべきではないかと提案したい。



防災ソング「お・は・し・も」の歌の練習
(スリランカ・マータラ 2006年2月14日)

総会の開催

6月17日にCODEの総会を下記のとおり開催します。総会は、CODEの1年間の事業計画と収支予算を決定、承認する会議です。今年度は総会後に食事をしながら、映像を使ってCODEの海外事業を報告する「CODEのタベ」(詳細は同封ちらし参照)を開催いたしますので、こちらもお誘い合わせの上ご参加下さい。どちらか一方のご参加でも結構です。

日時：6月17日(土) 総会 18:00～19:00
CODEのタベ 19:00～21:00
会場：サロン・ド・あいり(同封ちらし参照)
議題：2005年度事業報告及び決算の承認について
2006年度事業計画及び予算の承認について

総会ではCODEの正会員は議決権があり、それ以外の方々はオブザーバーとして参加になります。ご助言・ご質問などがありましたら、お気軽に事務局までお知らせ下さい。

舞子高校生からフィリピンの地滑り支援の募金

兵庫県立舞子高等学校の生徒が3月に三宮センター街周辺で行った街頭募金を、CODEに寄付して下さいました。

(写真：CODE事務所に募金を届けてくれた舞子高校生)
「震災の恐怖と寄せられた支援への感謝の気持ちは今も忘れない。今度は自分たちが手を差し伸べたい」「募金を通じて地滑り被災地に関心を持ってもらい、KOBEから“忘れていないよ”のメッセージを贈りたい」(毎日新聞より)といったさまざまな思いで、募金活動をしてくださった生徒のみなさんに心から感謝を申し上げます。



舞子高校以外にも多くの方々に地滑り災害のご支援をいただいております。改めて感謝申し上げます。

「平和について考える」講演会

CODEは神戸学院大学と連携して、講演会「平和について考える」を実施しています。(詳細はこちら <http://www.kobe-gakuin.ac.jp/campus/arise/access.html>) 一般の方も参加いただけますので、皆様お誘い合わせの上、是非ご参加ください。

テーマ：「NGOの人道支援とそれを支える仕組み」
日時：6月8日(木) 16:45～18:15
講師：大西 健丞氏(ピース ウィンズ・ジャパン 統括責任者)
会場：神戸学院大学有瀬キャンパス「マナビーホール」

テーマ：「体験的NGO論 - 紛争の中のNGO、そして課題」
日時：6月22日(木) 16:45～18:15
講師：熊岡 路矢氏(日本国際ボランティアセンター 代表)
会場：神戸学院大学有瀬キャンパス9号館 961
・定員：250名 ・参加費：無料
・問合せ：神戸学院大学 学際教育機構(078-974-2536)
参加希望の方は直接会場までお越し下さい。(事前申込不要)

活動記録 3/21～5/20

- 3月22日～26日 パキスタン派遣(村井・岡本)
- 3月22日 CS放送「読売ザ・Kansai」で放映
- 3月26日 ボランティアの日(CODEレター28号発行)
- 3月29日～4月7日 アフガニスタン派遣(村井・飯塚)
- 4月10日 神戸学院大学で講義「社会貢献論」(村井)
- 4月13日 舞子高校よりフィリピン支援金の授与式
- 4月15日 MBSラジオ「ネットワーク1.17」に出演(村井)
- 4月17日 神戸学院大学で講義「社会貢献論」(村井)
- 4月17日 4月度理事会
- 4月18日 大阪大学で講演(村井)
- 4月24日 神戸学院大学で講義「社会貢献論」(村井、ゲストSVA市川氏)
- 4月25日 アイセック神戸大学委員会で対談(飯塚)
- 4月29日 ボランティアの日(ぶどう新聞第10号発行)
- 5月1日 神戸学院大学で講義「社会貢献論」(村井、ゲスト飯塚)
- 5月8日 神戸学院大学で講義「社会貢献論」(村井)
- 5月11日 TV大阪「ボランティア21」より取材(村井)
- 5月16日 UNOCHA主催「NGO地域会議」(村井・飯塚)
- 5月16日 5月度理事会
- 5月20日 姫路中央ロータリークラブ学友会主催 講演会(村井)

ありがとうございます 3/21～5/20

会員・寄付者ご芳名(以下順不同・敬称略)
一般寄付
個人：宇田みどり、岡本牧子、塚本謙三、三田村雅、後藤堅吾(以上兵庫)、三島宣彦、成毛典子(以上東京)
会員
・**正会員**
個人：圓城啓彰、牧田稔、芹田健太郎(以上兵庫)
団体：財団法人PHD協会(兵庫)
・**賛助会員**
個人：宇田みどり、岡本牧子、光葉啓一、門永三枝子、市丸仁一、藤田正、片岡幸彦、上田耕蔵、鶴飼卓、祇園明敏、高橋智子、南輝子、浅野寿夫、植田博士、本宮広、後藤堅吾(以上兵庫)、伊永勉、中村安秀(以上大阪)、細谷祐司(奈良)、雄山真弓(滋賀)、岸本千恵(山梨)、吉田あち(千葉)
団体：アート・サポートセンター神戸、コープこうべ(以上兵庫)



プロジェクトニュース

・アフガニスタン
・スリランカ ・中南米

CODE海外災害援助市民センター
〒 652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10
Tel: 078-578-7744 Fax: 078-574-0702
e-mail: info@code-jp.org
URL: http://www.code-jp.org/

アフガニスタンぶどう畑再生プロジェクト（2002年7月～）

アフガニスタン訪問報告

4月にアフガニスタンを1年ぶりに訪問しました。アフガニスタンは3月頃から雪が溶け始め、春を迎えつつあります。気温が日に日に高くなり、ヒンドークシュ山脈の雪が少しずつ溶け始め、カレーズ（地下水脈）を通り、シャモリ平原のぶどう畑に命の水をもたらしています。

3年前に始まったこのプロジェクトは、アフガニスタンのシャモリ平原ミールパチャコット地域の4つの村で、紛争と干ばつで破壊されたぶどう畑をよみがえらせようというプロジェクトです。日本のぶどうオーナー（支援者）の方々からのご寄付で、ぶどう基金を設立し、その基金はシューラ（村人から選ばれた村の評議会）を中心とした協同組合という仕組みで運営されています（ぶどうオーナー随時募集中！）。1年目は288世帯のぶどう農家が協同組合から2%の利子でお金を借りてぶどう畑を再生、2年目は288世帯のうち、112世帯がお金を返済したので、新たに112世帯のぶどう農家にお金を貸しました。3年目は12世帯がお金を返還したので、288世帯から始まったぶどう農家は現在412世帯になっています。



ぶどう家族の人々 ～ファゼルモハメッドさん～

ファゼルモハメッドさん（写真で右から2番目）は、ぶどうの収穫から得た収入で、去年借りたお金の半分である1500アフガニー（約4000円）を協同組合へ返済することができました。そして、ファゼルモハメッドさんが返済したお金で、新たにシャモハメッドさん（写真中央の鍬を持った男性）が、協同組合から1500アフガニーのお金を借りることができました。お金を返済してどうですかとファゼルモハメッドさんにお聞きしたところ、「自分の畑のぶどうの収入で得たお金で、同じ村の他の人がぶどう畑を再生できることに大変うれしく思います。」とっていました。



ぶどう家族の人々 ～サマーガルさん～

寡婦のサマーガルさんにお会いしました。サマーガルさんは夫を8年前に病気で亡くし、1人で5人の子を育てています。協同組合から3年前に4000アフガニー（約1万円）のお金を借り、借りたお金はぶどう畑を耕す労働者を雇用するために使いました。サマーガルさんの畑のぶどうの収穫は年々増えているそうですが、お金はまだ返済できていません。お金を返済できなかった理由は何ですかと尋ねると、「バザールで売ったぶどうの収入は、家族のために他の果物を買ったり、肉を買ったりするのに使って返済するお金がなくなりました」とのこと。

ぶどう家族により、さまざまな事情があります。働き手を亡くした家族、カレーズから十分な水を得ることができない家族など。ぶどうの収穫は年々増えていますが、元の状態に戻ったわけではありません。シューラはそれぞれの農家の事情をくみながら、時にはお金を請求し、時には辛抱強く待ちながら今年の収穫に望みをつないでいます。

ぶどうが順調に成長し、全てのぶどう家族がお金を返済できることを望んでいます。しかし、村人から選ばれて、協同組合を運営しているシューラを信頼してCODEは今後も後方支援をしていきたいと思っています。

「よみがえれ アフガニスタン！」



スリランカ津波復興支援（2004年12月26日～）

「防災共育」プロジェクト

スリランカでは、今年1月から、CODE、スリランカ YMCA、国連ボランティアの三者で防災教育プロジェクトを展開しています。今回はその中の「防災マップ作成」のプログラムについて報告です。このプログラムは、濱田さんを含む国連ボランティアから指導を受けた現地のボランティアリーダーが中心となり、子どもたちがまち歩きを行い、その結果をもとに避難経路、避難場所や危険な地域を子どもたちが検証しながら地図を作成します。

（写真：ボランティアリーダーによる説明）



このプログラムはスリランカ南部マータラにある4つの村で2回にわたって実施しており、子どもたちは日常的に自分の足で村を歩いているので、自分たちの地域のことを実によく知っています。災害が発生した時の避難場所や避難経路について意見交換をしながら、子どもたちの視点で防災マップを作成しました。それは切り絵や塗り絵をしたり、米粉を使ったりした、とても個性的なものです。このようなマップ作りは、住んでいる地域や災害時の対応について、地域の将来を担う子どもたちが話し合ういい機会になりました。（写真：Talalla村で作成された立体的な防災マップ）



中南米ハリケーン支援（2005年10月～）

CODEは2005年10月初旬に中南米（メキシコ・グアテマラ・ホンジュラス等）で甚大な被害を出したハリケーン・スタンの支援募金を開始しました。日本ではあまり報道されず、アメリカのハリケーン・カトリーナの直後ということもあり、募金総額は限られました。しかし、CODEは直後から情報を提供してくれていた、CODE海外研究員であるメキシコ人のクワテモックさんにご寄付を託しました。集められたご寄付は、被災者の団結を呼びかけるリーフレット作成のために使われます。しかし下記のクワテモックさんからのメールにあるように、被害から半年以上が経ちましたが、支援が届きにくい被災地の悲惨な現状を踏まえて、今一度募金を呼びかけたいと考えております。皆さまご協力をよろしくお願い申し上げます。クワテモックさんより5月12日に来たメールを紹介します。

「募金総額の小切手を受け取りました。ありがとうございました。そのお金は、Chiapasにいるハリケーン・スタンの被災者との団結を呼びかけるリーフレットを作るのに使われる予定です。

ハリケーン・ミッチ以来、この地域で最悪の災害になりました。1500人以上の人々が亡くなり、メキシコ、グアテマラ、ホンジュラス、ベリーズに何千人もの被災者を出しました。ほとんどの死者はメキシコとグアテマラの人々です。約20万人が家を失いました。しかし、数ヶ月経っても、ほとんど何もなされていません。被災者の大半はまだキャンプや仮設住宅か、友人や親戚の家にいます。250以上の学校も壊れ、まだ再建されていません！さらに、川がまだ修理されておらず、この地域で雨が降り始めると、新たな洪水が発生する可能性が高いです。このようなことをお伝えすることは大変残念です。」

「中南米ハリケーン」救援募金にご協力下さい

郵便振替：00930 - 0 - 330579 加入者名：CODE

* 通信欄に「中南米ハリケーン」と明記してください。

募金全体の15%を上限として事務局運営・管理費に充てさせていただきます。

*それぞれのプロジェクトについては、ホームページで詳細を掲載しております。またご質問やご不明な点がありましたら、何なりと事務局までお問い合わせ下さい。